子どもと死の非－知性
―G. バタイユにおける内奥の生の体験―

宮　崎　康　子

1. 近代における死

近代は家庭のなかから死を隠蔽・排除してきた。都市化や核家族化により従来の地縁・血縁共同体は解体され、かつては共同体のなかで宗教や生活に分かちがたく結びついたものとして経験されてきた共同の死をめぐる世代的な教育は失われてしまった。

近代思想が主体（自立した個体）にその特徴を持つように、近代における死は個人の問題となった。とくに現代社会では、徹底管理された病院に隔離された病人は家で死ぬことすら困難になり、衛生的に保たれた街並に動物の死骸が放置されることもほとんどない。その他方、メディアやゲームを通じたバーチャルな死が氾濫している。普通に生活をしている限り、現代人の日常における死はリアルさを欠いたものとなっている。しかし、そうであるがゆえに、個人はどう自分らしく死ぬか／生きるかということを問う声が大きくなってきている。より良い死を、より充実した生とはどのようなものなのだろうか。

死をめぐる問いに対して、わたしたち大人もうまい答えを見つけ出すことができない。大人にとっても死は観念でしかなくなりつつあるからだ。死がリアルさを失うということは、死によって限界づけられるがゆえに意味を帯びる生もまた、リアルさを失うことになる。このことは言うまでもなく、他者の生命の軽視と、翻って自分の生の軽視が、安易な死の選択へとつながっている。大人ですら死をリアルに感じられなくなっている状況のなかで、子どもは死をどのように認識しているのだろうか。大人社会に参入しきれていない子どもの死をめぐる体験は、大人の目線では計ることのできない次元につながっているのではないか。大人や社会や教育は、子どもたちにどのように死を学ばせていけばよいのだろうか。

本論は、現代における死の体験の逆説的な意義を考察しようとするものである。まず、近代という時代の悲劇的な頂点である戦争――死が日常となる極限状態における死をめぐるイメージを、映画「禁じられた遊び」（1952 年）のシーンから概観し、次に、子どもにおける死の概念とはどのようなものかということについて、アンケートおよび保育日誌の記録からの調査結果をもとに考察する。そして、死の「内的体験」が主体意識を超えて「わたしの全体」の生の瞬間を開くと述べるフランスの思想家ジョルジュ・バタイユ（Georges Bataille, 1897-1962）の思想に依りながら、子どもにおける死の概念と体験の意義を考察する。

1-1. 大人にとっての死の意味と子どもにとっての死の意味―『禁じられた遊び』にみる死

二人の子どもが無数の墓を見つめている。墓には二人の手によって十字架がかけられていく。光の差し込む水車小屋のなかの光景は、ルネ・クレマン（Rene Clement, 1913-96）監督による「禁じられた遊び（Jeux interdits）」の一シーンである（図 1）。戦争孤児となった子どもの視点から反戦をテー

マに描かれたこの映画には、多様な死の姿が描かれている。

まず、映画「禁じられた遊び」が制作された背景に少し触れておこう。

脚本家フランソワ・ボワイエ（François Boyer, 1920-2003）のデビュー小説である *Les Jeux inconnus*（1947 年）は、フランスではなく、アメリカで *The Secret Game*（秘密の遊び）というタイトルのもと、ベストセラーとなる。

図 1　無数の墓を見つめる
ポーレットとミシェル

最初のタイトルにある「遊び（Jeux）」を修飾する *inconnus* は、「無名の」、「未知の」、あるいは「風変わりな」という意味になるが、「名前のない遊び」や「知られざる遊び」よりも「秘密の遊び」、そして「禁じられた遊び」というタイトルの変遷と、それに伴う作品の受容にこそ、わたしたちの死の取り扱いに対する頑強なイメージの存在を反映していると思われる。ルネ・クレマン監督によって映画化されたボワイエの小説は *Forbidden Games*（禁じられた遊び）とタイトルが変えられ、1953 年に同じくアメリカで公開されると同時に、世界中で記録的なヒットとなった[1)]。

ここで「遊び」として示されているのは、幼い子どもたちによるお墓作りである。それが大人の目には子どもの悪い遊びとして映るのである。そのお墓作り遊びは、物語のなかでは直接的に禁じられている場面は登場していない。それにもかかわらず、お墓を作ること、つまり、死に直結して行われる埋葬の儀式や習慣は、遊び、それも子どもが行う遊びとしてもっともふさわしくない、あるいは、禁忌であるとの意識がわたしたちのなかにあることに気づかされるのである。死の概念に注目しながら、映画「禁じられた遊び」の内容に目を向けてみよう。

物語は、1940 年 6 月のナチス・ドイツによるフランス侵攻から逃れて郊外に向かう人々の描写から始まる。主人公の幼い少女ポーレットは、両親に連れられて郊外へと逃れようとしていたとき、腕から逃げ出した愛犬を追って人々の列から離れ、彼女を追った両親は、橋の上で、爆撃機からの機関銃掃討により命を落としてしまう。ポーレットはそのことに気がつかないのか、子犬を腕に抱き、ただ蹲っている。犬も程なく息を引き取る。死んだ犬を抱えて道をとぼとぼと歩くポーレットを馬車に乗った老夫婦が拾う。老夫婦は、その犬はもう死んでいるとポーレットに告げ、犬の死骸を無造作に川へと放り込む。

ポーレットは、馬車から抜け出して川に流されていく犬を追いかける。そのときに、逃げた牛を追ってきていた 11 歳の少年ミシェルと出会う。ミシェルは、郊外の農家ドレ家の末っ子である。ミシェルに、新しい子犬をあげると言われたポーレットは、ごく自然な動作で子犬の身体を道端に放り出す。

ポーレットは、一時的にドレ家に保護されたものの、ドレ家の日常にも戦禍による死が侵食している。さらに、たまたま牛に蹴られて重傷を追っていた長男も、怪我が悪化し亡くなってしまう。そのときに、死んだらお墓をつくるものだと聞いたポーレットは、水車小屋のなかに愛犬の墓を作り、ひとりぼっちではかわいそうだと死んだ動物を集めて、周りに多くの墓を作っていく。

水車小屋の墓地は、花や盗んだ十字架によって彩られ、その情景を満足そうに見つける二人の子どもの表情と相まって、観るものに荘厳な印象を与えている（図 2）。

しかし、二人の神聖な遊び／儀式は大人に見つかり、二人ともひどく叱責される。そして、ドレ家の家人が申請していたポーレットの見受け先が決まり、ポーレットは引き取られていくことになる。修道女に連れられて駅に着いたポーレットは、修道女が目を離した隙に、ひとり雑踏に紛れる。映画は、ポーレットがミシェルの名前と母を呼んで走り去ってゆく姿と、その悲痛な響きを持った叫びが印象に残る。

図２　水車小屋の中の墓地

この物語のなかで、ポーレットは５歳――幼すぎて、まだ死を理解できない存在として描かれている。両親が目の前で死んだときも泣かず、むしろ死んだ愛犬により愛着を示しながらも、代わりの犬をもらえるという言葉でその死骸も無造作に置き去りにしていく。死による別離では泣かなかったポーレットが初めて涙を流すのは、最後の別離のシーンだ。幼い少女にとって、ミシェルとの別離は、両親の死よりも衝撃を持つものなのだろうか。

５歳未満の子どもにとっては、死は愛する者との分離と同義だとする意見もある[2)]。愛する者に会えなくなることが死であるという理解は、大人にとっても間違いではない。しかし、ここには死の不可逆性についての認識や、翻って生の有限性についての理解は見られない。愛する者との別離と同義とされるこのときの死は、大人がイメージする死とは大きな隔たりがある。物語のなかで、大人にとっての死は、戦争による具体的な肉体の死であり、秩序立った日常に暴力的に入り込んできた非日常の死である。それゆえに、ポーレットとミシェルの「遊び」は、死および死者を冒涜するものとして叱責の対象となったのだ。それに対して、子どもにとっての死は、日常そのものとして淡々と描かれている。むしろ、ポーレットの孤独こそがリアルな具体性をもって描かれている。年齢的な幼さゆえに死を理解できていない少女の無垢さが、かえって死や別れをもたらす戦争の残酷さを強調しているわけである。しかし、少女は本当に、大人がイメージするような意味での死を理解していないのだろうか。この疑問に応えるために、子どもにおける死の概念の一般的なイメージを、アンケート調査および保育日誌調査から、とくに５歳未満の子どもに焦点を当てて見ておこう。

1-2. 子どもと死についての意識－アンケートおよび保育日誌調査から

著者は、「子どもにおける死の概念」というタイトルで、子どもにとっての死の意味を探るためにアンケートおよび保育記録（実際の保育日誌に記された保護者や担当保育士の子どもの死をめぐる日常の言動についての記録（以下、「保育記録」とする））の調査･分析を行ったことがある[3)]。アンケート調査の結果には、死を初めて意識した年齢には個人差が大きく、幼稚園・保育園の時だったという漠然としたものから、大人になってから（18 歳以上）という回答も見られ、その際のエピソードも多岐にわたっていることが確認された。また、５歳未満においては、死を意識していないことも確認される（表 1）。調査結果の全体を見ておく。

初めて死を意識したきっかけとして一番多く挙げられたものは、誰かの死（葬式）を経験したときの悲しみを挙げるもので、少ないながらも、メディア（事件・事故・災害のニュースあるいは絵本やアニメのストーリー）によるものや、道徳の時間に死について考えさせられて、という回答もあった（表

2)。これらは、18歳以上（大学生）を対象としたアンケート結果によるものなので、回想のなかの記憶と実際の体験による記憶とが異なっている可能性は否めないが、死は内的に衝撃を受けた体験と、そして外部からの学びによってその概念が形成されていくのではないかと考えられる。

次に、子どもの日々の姿を記録した保育日誌には、次のようなものが見られた[4]。保育日誌の記入者は保護者（主に母親）と担当保育士による。

・動く虫はあまり触れないが死んだセミなどは大切にずっと持っていたりする。（1歳2ヶ月児）
・せみの抜け殻を渡すと「しんだー」と言って見ていた。（1歳2ヶ月児）
・かたつむりを殻から外し、つぶした物を、保育士に見せる。保育士がびっくりした顔を見せると、捨てる。（1歳9ヶ月児）
・園庭で死んでいる昆虫を見つけると、「死んでるねー」と言ってスコップで触ろうとする。（1歳11ヶ月児）
・夏、セミを大事そうに持っていた子どもが、遊んでいる途中でセミが死んでしまったので、保育士が「死んじゃったね」と言うと、子どもは「ん？」と聞き返し、「しんじゃった？」と聞くが、意味はわかっていない様子だった。（2歳児）
・園庭で、死んでいる昆虫を見つけると、「死んでるねー」と言って葉っぱの上に乗せて遊ぶ。（2歳3ヶ月児）
・家の駐車場にセミが死んでいました。それを見つけた○○は、「わっ!! イヤ」とダッシュ!! 相当怖かった様です。。（笑）。（2歳5ヶ月）
・園庭で、動かなくなったセミを見つけて、容器に入れてずっと見ていました。口を見て、「せんせー、ストローがあるよ」と知らせてくれました。／［翌日］今日も園庭で動かなくなったセミを見つけていました。今日は手でつかんでいましたよ。（2歳6ヶ月）

表1　死を意識した時期

死を意識した時期	回答数		
1歳	0	7	
2歳	0		
3歳	0		
4歳	0		
5歳	2		
小1	6	7	7
小2	2		
小3	2	1	
小4	3		
小5	7	3	
小6	3		
中1	3		
中2	1		
中3	0		
高1	2	3	
高2	2		
高3	2		
18歳～	2		
覚えていない	2		
未回答	5		

表2　初めて死を意識したときの具体的なエピソード

初めて死を意識したときのエピソード		回答数
人の死	家族・親戚の死	35
	友だち・先生・隣人の死	4
死んだ動物・虫をみたとき		1
自分が死にそうになったとき（病気・怪我・その他）		4
人間関係が悪化したとき（いじめ・失恋など）		5
いつの間にか自然に		3
夜寝るときに深く考えて		2
事件・事故・災害などのニュース		3
絵本の読み聞かせ・アニメ・道徳の時間		4
親の言葉（「死んだひとはお星さまになるんだよ」等）		2

・死んだカブトムシの墓を作る為、穴を掘る。その後、「みんなでカブトムシのオカハ...（墓）作ったねー」と言う。（2歳9ヶ月）

上記のように、保育日誌に書かれた観察記録には、子どもの、死に対する恐怖よりも好奇心が強く出ていると思われる。死そのものというよりも、動いているものが動かなくなることへの不思議が勝っている。

「子どもにとっての死をどのようなものだと考えるか」という設問には、「不可能・無関係・現実的ではない」などとする回答が一番多くあったが、「なんでだろう？ 不思議」と回答したものもあった（表3）。動かないのは一時的なことで、なにかの刺激で再び動き始めるのではないかといった感覚が見て取れる。つまり、死が、絶対性を持つ一度限りの不可逆的な出来事であることは理解できていない。

回答のなかには、「隣家の寝ている犬を見て、『あ、死んでる』と言う」といったものや、「虫（ダンゴムシ）に興味はあるけど触れず、ボウルに入れてあそんでいた子が...、丸くなって動かなくなると「死んじゃった」と言う」というもの、また保護者からのアンケートには、次のような回答もあった。

・2歳になる息子は、父［子どもの祖父］のお葬式で、「じっじっ ねんね」と父の顔を見ながらずっと言っていました。亡なっているとは、思っていないと思いますが、子供は、親や周りの人々と表情で、なにかを感んじとり、自分で物事を考えていると思うので、まだ、早すぎる質問だと思うし、大人になるにつれ、分かりだす事だと思います」

ここから推察されることは、子どもにとっての死は、大人がイメージし、子どもに教えようとする死ではない、ということだ。また、保育日誌には、次のような場面の記録もあった。

・昨夜、△△がおもちゃ入れ（ケンタッキーのパーティバーレルの箱）を私の頭にかぶせてきました。授乳中だった私はそのままびくとも動かず、しゃべらずジーとしていました。すると！「いやー怖いー」「ママー △△ちゃんのままー どこー」と大泣き！びっくりして、立ち上がり、△△に近づくと、「こないでーいやー オニ おばけー」とギャン泣き ... 何故!?（2歳4ヶ月児）
・「お母さん、死んだ」といって、目をつむり動かないでいると、とたんに悲しい顔をして、「エーン、エーン」と泣き出す。そして「××ノカァチャン、シンダ、イキテー」といつまでも泣き続ける。いかにも悲しそう。（2歳4ヶ月児）

表3 子どもにとっての死をどのようなものだと考えるか

子どもにとっての死をどのようなものだと考えるか	回答数
理解不可能・無関係・現実的ではない	24
時間の経過とともにわかるもの	7
動かなくなる・いなくなる・形が変わる	20
一緒にいられない・どこかに行くこと	7
さみしい・悲しい・怖い	12
なんでだろう？ 不思議	2
その他	12
未回答	8

「いやー怖いー！」「ママー、どこー！」という叫びには、母親の不在に対する恐怖がある。このときの不在は、正確には不在ではなく、「そのままびくとも動かず、しゃべらずジーとして」いたことを指すわけだが、いつもであれば反応を返してく

れる最も身近な存在の母親が動かない、ということが恐怖を引き起こしている。次の例も同じである。ここでは、ポーレットの場合と同様に、愛する者の不在／喪失の感覚が悲しみや恐怖を呼び起こしていることがわかる。

表4　初めて死を意識したときの体験を現在どう考えるか

初めて死を意識したときの体験を現在どう考えるか	回答数
とにかくショック	7
悲しみ	12
不在	8
不安・恐怖	10
感謝・命を大切にしたい	6
無	1
理解できなかった	2
後悔	1
たいしたことではない	1
その他	17
未回答	8

「初めて『死』を意識したのはいつですか？」という設問に対しては、この他にも、死を初めて意識したときを自分でも覚えておらず、「いつのまにか」あるいは「未だにわからない」という回答や、保護者や保育士からは、アニメーションを見ていて登場人物が死んだとき、ペットの死、肉親の死、あるいは保育園のお友だちが転園などでいなくなったときに、という回答など、様々なエピソードが出てきた（表1および2）。それらを踏まえての、「初めて死を意識したときの体験を現在はどう考えるか」という設問に対しては、死とは「いつのまにかわかっていた」という回答の他に、「時間の経過とともにわかるもの」という回答も複数あった。このことからわかるのは、他のあらゆる物事と同様に、子どもは、大人／社会がイメージする死を、経験を通して学習していくということである。

その他、アンケートおよび保育記録の結果からは、敢えて言えば、子どもにとっての死とは個々人にとってのなにか衝撃的な体験であるという共通項のみが残る。このことは、大人が客観的に判断する実際の死にまつわる経験が、子どもにとって必ずしも死として意識されているわけではなく、同様に、子どもにとっての強烈な喪失体験、すなわち、死の体験が、大人がそれとして知や理性によって理解する死と直接には結びついていないということも示している。つまり、死にまつわる体験は、きわめて個人的で内的な体験なのである。それは「非－知（non-savoir）」（バタイユ）として子どもの前に立ち現れる出来事なのだ。

しかし同時に、子どもにとって死をめぐる体験は、一般に、喪失体験として人間の有限性と生の不可逆性とに触れる出来事であるがゆえに、この体験を経ることが「大人」と呼ばれる存在へと成長するための最初の第一歩とされる。それは、「人間」として生きるということでもある。

ヘーゲル（G. W. F. Hegel, 1770-1831）は、『精神現象学』（1807年）において、死を怖れつつも、その恐怖に耐え、死を直視することが人間としての「精神の生（das Leben des Geistes）」を目覚めさせると考える。つまり、近代思想の特徴である主体の確立を、ヘーゲルは死の意識に見ている。このことは、わたしたちの日常を振り返るまでもなく、現代社会を生きるわたしたちにとって大変重要な指摘であることは間違いない。しかし、ヘーゲル的な、つまり理性を持った大人が持つ（べき）死の概念でもって、子どもにおける死の概念をはかることはできるのだろうか。それというのも、子どもはまだ理性による世界把握の段階に達していないと考えられるからだ。

そこで、このヘーゲルの有名な言葉に代表される思想を、基本的には踏襲しつつも批判的に発展させ、弁証法に回収されない独自の思想を展開しているバタイユにおける死の概念を考えてみよう。バタイユは、子どもの子ども性とでも呼ぶべき存在様式を、人間がその生の全体性に触れる契機と

して捉えている。

2. 概念としての死と自己意識の死

2-1. 死の意識の契機

バタイユは、生物学的な動物としてのヒトがその他の動物と区別され「人間」となる契機を、死に対する意識と道具の使用にみている。死を意識し始めた太古の人間について、バタイユは次のように考察している。

太古の人間は、それが死だという明確な認識はなくとも、そこになにか暴力的な力が存在しているということを感じていた。だからこそ、その暴力的な力を連想させる死や屍体、死にまつわる事象への接近を禁止し、埋葬が始まった。バタイユは、最初の道具は死体の埋葬のために使われたと考える[5)]。

バタイユの考えでは、ヒトとしての動物である人間は、その他の動物のように世界との直接＝無媒介＝な即時性 immédiateté であり、内奥性 immanence として[6)]、「水のなかの水」のようにして存在していた。「水のなかの水」のようにして在る在り方とは、そこに主客の別はなく、ただ存在していること自体に価値があるような在りようである。このような自然的な所与のままに生きている在りようを、バタイユは世界との連続性のうちにある「動物性（animalité）」の次元と呼ぶ。しかし、道具の使用はそのような在りようを否定し、使用の目的（その結果）との関係で道具の有用性を価値づける。バタイユは次のように述べる。

「練り上げられた道具は、非－自己の生まれつつある形態である。

道具はある一つの世界の内に、外部性というものを導入する。つまり主体はそこでは自らが区別している諸要素の性質を分かち持ち、また世界の性質を分有しつつ、『ちょうど水が水のなかにあるように』とどまっている世界の内に、外部性を導き入れるのである」[7)]。

道具、つまり、未来の目的（結果）のために利用する物という意識の誕生は、道具を使う自己（主）と使われる道具（客）という分離をもたらす。また、道具の作成に費やされた時間は、その道具の使用の結果に結びつけられ、その道具が何に役立つかということが、つまり有用性が示されるようになる。有用性は死を遠ざけようとする原理である。有用性への傾倒は労働の概念を生み、労働は死からの逃走という側面を最初から含み持つことになる。こうして、人間は「人間性（humanité）」の次元に生きるようになる。そして、その人間性の次元は、有用性の次元としても指し示される。

ところが、道具の使用による事物／客体と使用者である主体という分節は、使用者をも有用性の次元へと位置づけることにもなる。人間／主体もまた客体となるのである。バタイユにおいて人間性の次元とは有用性の次元であり、人間はそこに隷属させられていると考えられる。道具の使用と死の概念を持つようになることによって、世界は人間にとっての物＝客体となり、その程度に応じて人間は内奥的な生を忘却していくのである。

2-2. 内奥の生に触れる死

内奥的な生は世界との連続性のうちにあった。そのような存在の連続性に死は到達することができないとバタイユは述べる。バタイユの言葉を引用してみよう。

「存在の連続性は存在の根源にあるのだから、死はこれに到達することができず、存在の連続性は死とは無関係である…（中略）…むしろ逆に、死が存在の連続性を顕現する」[8]。

ここでバタイユが死と呼ぶものは、死そのものでも、死によってもたらされる死骸でもない。それは、わたしたちの持つ死についての意識のことである[9]。バタイユは、死を概念として意識することについて、「ヘーゲル、死と供犠」（1955年）において、ヘーゲル思想において「最も重要なテクスト」として『精神現象学』の序文の一節を引用している。少し長いが、バタイユが引用している箇所をヘーゲルの言葉で確認しておこう。

「前に言った非現実性を死と呼ぶならば、この死こそは最も恐ろしいものである。力のない美は悟性をきらう。それは、悟性が美の果たしえないことを求めるからである。だが、死を避け、荒廃からきれいに身を守る生ではなく、死に耐えて死のなかに自己を支える生こそは、精神の生である。精神は、甘んじて、自ら絶対的分離のなかにいるときにだけ、自らの真理をえている。精神がこの威力であるのは、否定的なものから目をそらすような、肯定的なものであるからではない。つまりわれわれが何かについて、それは何物でもないとか、偽であるとかいって、それに片をつけ、それから離れて、別のものに移って行く場合のようなものであるからではない。そうではなく、精神は、否定的なものに目をすえて、それに足を止めるからこそ、そういう威力なのである。このように足を止めることが、否定的なものを存在に向けかえる魔力である」[10]。

ヘーゲルは、生を破壊する否定的な力である死を、それにもかかわらずに、遠ざけようとするのではなく、死を見据え、死のそばに留まることによって、初めて人間の精神は目覚めると述べている。

ヘーゲルにとって精神とは知の総体である。知は、現実を超える非現実的なものをも名づけることによって把握しようとする。名づけられた死は、ただ肉体が滅びることではもはやなく、悟性つまり言語によって知の対象とされた死のことである。それは「まさしく人間的な死」である。このことについて、バタイユは次のように述べている。

「唯一言語だけが諸々の構成要素の分離に確固たる基盤を与えるのであり、またそのようにしながら言語は、分離され名指された実体たちの世界のなかで、構成要素の分離の上に立脚しているのである。だがこの活動のなかで、人間的な動物は、死を発見する。この死とはまさしく人間的な死にほかならない。それは、恐怖に陥れ震え上がらすことのできる唯一の死である。ただし恐怖に陥り震え上がるのは、自らの来たるべき消滅を意識しその意識に捕われている人間、そういう人間だけである。このような死こそ唯一真正の死なのである。すなわち個人の分離と、分離をおこなう言説による、分離されていることへの意識とを前提にする死である」[11]。

動物性の次元においては、死はなにものでもなかった。道具／言語は、現実的で具体的な事象を抽象化し、概念へと生成することができる。言語という道具によって世界から切り離された人間だけが、死を意識する。ヘーゲルにおける死は、精神が認識する可能性としての死なのである。バタイユはここからヘーゲルを批判的に継承する。ヘーゲルにおける死が、弁証法的な円環のなかに位置づけられることとは異なり、バタイユは、死を、「わたし」という自己意識を超えた次元にも関わる出来事として捉えようとする。死はたしかにこの「わたし」に起こることであるが、厳密には「わたし」はその出来事を把握することはできないのだと考える。バタイユは次のように述べる。「死は、ある意味では不可避なものであるが、より深い意味では接近不可能なものである」[12]。

バタイユにとっての死は、弁証法に収まらない死、決して完了しえない死の瞬間に宙づりにされ

た自己意識という両義性を秘めたものとして考察される。それというのも、人間にとって、死は直接的に認識することはできないからだ。肉体が死ぬと、意識もまた死を迎えるからである。そこで、バタイユが注目するのは、「表現（représentation）」としての死である[13]。人間が、表現において死を模擬的、模造＝擬態的[14]に生きることにバタイユは注目し、見世物における反復される虚構の死、とくに供犠において普遍的に見られる生け贄の殺害を凝視し、自分自身が死にゆくかのような瞬間の体験について考察を展開していく。この瞬間の体験は、バタイユの思想においてに重要かつ中心的な意味を持つ。

「たしかに人間の死は創造的である。しかし死への―死のみごとな魔術への―意識が、この人間の死ぬ前に、この人間に生じないのならば、生きている間この人間にとっては、あたかも死がこの人間に到達しないかのようになってしまうだろう。来たるべき死は、この人間に、人間の特徴を与えることができなくなるだろう。それだからぜひとも人間は、本当に死につつあるときに生きていなければならないのである。もしくは本当に死につつあるという実感とともに生きなければならないのである」[15]。

このような生の側面は、動物性への回帰ではなく、一度人間性を経たうえでの連続性への再帰として、「至高性（souveraineté）」の次元において開かれるとバタイユは述べる。このような至高性に触れる瞬間の体験は、現代においても芸術や祝祭、遊びやスポーツあるいはエロティシスムなどの諸活動において見出される。

3. 死の非－知性

至高性に触れる瞬間の体験は、「内的体験（l'expérience intérieure）」の瞬間であり、知や理性には決して回収できない「非－知」の瞬間でもある。

「内的体験」は、バタイユの思想において中心的な位置をしめる鍵概念である。統一された自己という主体が、主体の外へと解体される体験であり、個人的、内的なものとして生きられる。それは、学習あるいは労働の結果として蓄積される経験とはまったく異なる概念である。バタイユは、「内的体験」を次のように説明している。

体験は「生きなければならない…。やすやすと到達できるものではない上に、これを外から知性の眼で見るときには、そこにそれぞれが異質な営為の総和を、知的、美的、また倫理的営為の総和を見なければならないだろう。…（中略）… 体験が、推論的思考ならばらばらにしてしまうものを一つに結合するものとして現れるのは、内から失神的陶酔に至るまでこれを生き抜いたときのみである」[16]。

このように、バタイユは人間の生を総和として結合するものとして体験を捉えている。そのような体験の究極的な例として、模擬的な死の体験があった。その他に、内的体験をもたらす出来事としては、笑いや涙、ポエジー、エロティシスムなどが挙げられるが、それらはすべて自己を供犠に捧げ、蕩尽することで偶発的に生起する出来事である[17]。

バタイユによれば、前述のように、そもそも人間は、直接的・無媒介的・内在的な在りようで世界に連続して存在していた。死の概念の獲得と道具の使用によって、そのような動物性の次元に否を唱え、人間性の次元に生きるようになった。しかし、このことは、人間の生の全体にとっては、有

用性の次元に隷属させられることである。したがって、人間には世界との連続性へと再帰することを渇望する動きも内包されるとバタイユは考える。供犠においては、連続性への回帰の動きが、事物における事物性の破壊として現れる。供犠において「現実秩序が投げ棄てるのは、死がそうであるような現実の否定というよりはむしろ内奥的な、内在的な生命の肯定、つまりその際限のない激烈さ＝暴力性が事物たちの安定にとって危険であり、また死においてのみ初めて十分に啓示されるような内奥の生命の肯定なのである」[18] と、バタイユは考える。

このような、内奥の生命の肯定という観点から、子どもにおける死の概念を捉えることは可能だろうか。死が日常から隠蔽される近代において大人がイメージする死ではなく、死をバタイユが考察するように、表現において擬態的に生きられる死の体験として敷衍しなおしたとき、たとえば、有用性原理に回収されない純目的的行為である「遊び」も、死と同じ強度をもつことになる[19]。

バタイユは遊びを次のように捉える。有用性の次元が、現在の瞬間を隷属させるような在りようだとすると、至高性とは、時間の蝶番を外れた瞬間であり、それゆえに、死によって分節されない瞬間の生をただ強烈に生きることを意味する。何かの目的のための手段として回収されない遊びは、この意味において、至高性へと遊ぶ主体を連れ出す。至高性へと開かれた遊ぶ主体はそのとき、生の歓喜の中で至高性そのものである「至高者（le souverain）」となる。このことを、バタイユは次のように述べている。

「至高者は自己同一性の諸々の限界を知らないのと同様に、死の限界も知らない。というよりむしろそれらの限界は同じものなのであって、至高者とはまさにそのいずれの限界も破る侵犯なのである。他の人間たちのただなかにおいて、至高者は一つの労働としてあるのではない。つまり操作され、挙行される労働としてあるのではない。至高者とは一種の戯れ＝賭 jeu なのだ。われわれがふつう共通に抱いている遊びのイメージは（子どもの水準に釣り合ったような）マイナーなイメージにしか過ぎないのに対し、彼はある大いなる戯れの完璧なイメージなのである」[20]。

このような至高者の在りようは、大人的な死の概念を学習する以前の子どもの生そのものではないだろうか。死の内的体験が、私の生の全体を開き、生をもっとも輝かせる、というバタイユの考えは、死を自己意識からの超出として捉え直すときに、遊びに熱中することや笑いの渦に巻き込まれることなどの、子どもの日常の姿に重ねて考察することが可能となる。バタイユのこのような思想は、知による世界の把握を称揚してきた近代という時代において、わたしたちの意識を遊びとしての内奥の生の肯定へと連れ戻す。このように考えると、子どもにおける死の概念は、死の非 - 知性として捉えられるものであり、大人が考えるよりも豊穣な広がりを持った体験をもたらすものとして再考される。

注

1）この映画は、ベネチア国際映画祭でサン・マルコ金獅子賞（1952 年）を始め、アカデミー賞名誉賞（後の外国語映画賞）（1953 年）、ブルーリボン賞最優秀外国語映画賞（1954 年）など世界中で数多くの賞を受賞した。

2）E. A. グロルマン『死ぬってどういうこと？ 子どもに「死」を語るとき』兼重祐子訳、春秋社、1992 年。グロルマン（Earl A. Grollman, 1925-）は、アメリカのユダヤ教の聖職者であり、死による別離の悲しみを癒すグリーフ・ケアおよび「死の準備教育（Death Education）」の活動で知られる。

3）このアンケートおよび保育記録の調査分析は 2013 ～ 2015 年に行った。
アンケートは自由記述式とし、設問は次の 4 問とした。1.「初めて『死』を意識したのはいつですか？」、2.「そのときの具体的なエピソードを教えてください」、3.「そのときの体験を、現在思い返してみてどう

考えますか？」、4.「子どもにとっての死とはどのようなものだと考えますか？」。内容がプライバシーにも関わるデリケートな性格をもつものであることを考慮し、匿名での記入および未提出も自由とした。表記は記入者にしたがっている。

本人に関するアンケートについては、著者が当時授業を受け持っていた立命館大学および神戸女学院大学の 20 ～ 22 歳の学生に、子どもに関するアンケートおよび保育記録については、社会福祉法人アイリス康友会曽師保育所および保護者の方、総勢 81 名の方にご協力いただいた。

4）2014 年 11 月と 2015 年 4 月の 2 回にわたって、2010 年度から 2015 年 4 月までの 5 年間の保育日誌の記録を調査させていただいた。本文中のエピソードはそこからの抜粋である。また、保育士および保護者の方にもアンケート調査をお願いしたので、そこに回答された内容も入っている。表記は記入者にしたがっている。

5）Bataille Georges, L'Érotisme, *OEuvres completes*, X, Paris: Gallimard, 1987, pp. 45-48.（『エロティシズム』酒井健訳、筑摩書房、2004 年、61-65 頁）以下、このバタイユの全集については、*OE.* とのみ表記し、巻数を記載する。

6）Théorie de la religion, *OE.*, VII, pp. 291-292.（『宗教の理論』湯浅博雄訳、人文書院、1995 年、19-22 頁）

7）*Ibid.*, 1976, p. 297.（『宗教の理論』湯浅博雄訳、人文書院、1995 年、33 頁）強調はバタイユ。

8）L'Érotisme, *OE.*, X, 1987, p. 27.（『エロティシズム』酒井健訳、筑摩書房、2004 年、32-33 頁）強調はバタイユ。

9）*Ibid.*, p. 47.（『エロティシズム』酒井健訳、筑摩書房、2004 年、63 頁）

10）G.W.F. ヘーゲル『精神現象学』上、樫山欽四郎訳、平凡社、1997 年、49 頁。

11）《Hegel, la mort et le sacrifice》, *OE.,* XII, p. 332.（「ヘーゲル、死と供犠」『純然たる幸福』所収、酒井健訳、筑摩書房、2009 年、179 頁）

12）L'Expérience intérieure, *OE.*, V, 1973, p. 86.（『内的体験 無神学大全』出口裕弘訳、平凡社、1998 年）

13）*OE.*, XII, p. 337.

14）湯浅博雄『バタイユ 消尽』講談社、1997 年、292 頁。

15）*OE.*, XII, p. 337.

16）*OE.*, V, p. 21.

17）「内的体験」については、知を超える体験をいかに語るかという問題意識から、以下において論じている。「『内的体験』における『外』の語り―G. バタイユの不可能なものの語りと読みの位相」『関西教育学会研究紀要』5、関西教育学会、2005 年、63-76 頁。

18）*OE.*, VII, p. 309.

19）バタイユにおける遊び論については、以下において論じている。宮崎康子「教育･遊び･人形―ベルメール－バタイユにおけるメディアとしての人形／人間」『臨床教育人間学』8、京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座、2007 年、35-44 頁。

20）LA SOUVERAINETÉ, *OE.*, VIII, 1976, p. 270.（『至高性』湯浅博雄・中地義和・酒井健訳、人文書院、1990 年）

（広島修道大学准教授）